

(研究ノート)

日本人アスリートを対象とした効果的な英会話教育開発のための研究ノートⅡ

Brief Report II on Developing Effective English Education for Japanese Athletes

前川 未知雄

Michio MAEKAWA

1. 研究の目的と背景

海外移籍を控えたプロアスリート2名を対象に、海外チームでの円滑なコミュニケーションを目的とした英会話トレーニングを実施し、その指導過程および成果を本研究ノートで振り返ることとした。本ノートは前川（2023）の続編にあたり、継続的に個々の英語指導事例について考察を行うものである。

いまや、サッカーや野球といった人気競技にとどまらず、さまざまな種目で日本人アスリートが海外移籍や国際舞台で活躍することは特別な出来事ではなくなっている。国際大会、海外遠征、さらには移籍の場面において、彼らは避けて通れない形で外国語、なかでも英語を駆使することを迫られる。語学力はもはや「補助的な知識」ではなく、アスリートの競技力やキャリア形成に影響を及ぼす要素の一つとして捉えられるようになっていく。今後は、選手のみならず指導者においても国際的な活動の機会が増えることが予想される。こうした状況を踏まえ、日本人アスリートの英語力強化に特化した教育手法の構築が求められていると考える。

2. 対象・方法

本研究では、アスリートCおよびアスリートDの2名のプロアスリートを対象に英会話指導を実施した（※1）。指導時間の概要は表1に示す。指導方法については、前川（2023）の手法を基本的に踏襲した上で、各対象者の特性に応じた調整を行った。アスリートCには、①文法事項の理論的説明および暗記、②競技動作に関する表現の習得、③インタビュー場面での応答練習を組み合わせて指導した。しかし、暗記学習への強い抵抗感と競技活動の多忙さにより、知識の積み上げを前提とした学習計画を進めていくことが困難で、すべての項目を十分に実施するには至らず、実際の指導内容は①文法の理論学習と日常会話練習を中心とする構成となった。一方、アスリートDには、①文法事項の理論的説明と暗記を基盤とし、②競技動作に関する表現習得、③①・②で学んだ表現を活用した英語による競技日誌の作成、④YouTube動画を用いたリスニング練習を取り入れた。特に①および②

表 1：所要学習時間

	指導期間	指導頻度	指導時間	週間自学習時間
アスリート C	10か月間	平均週 1 回	平均 90 分	30分程度
アスリート D	11か月間	平均週 2 回	平均 120 分	2～4 時間程度

表 2：主な学習内容（語彙・文法のインプット内容）

	中学英語理解度（※ 2）	概算暗記量	暗記内容の内訳（※ 3）
アスリート C	約 50%	例文×約 300	1 文法書記載の基本例文 <u>300文</u> ただし完全に暗記をしたとは言い難い状態でそのほとんどが不完全な記憶に留まっている。
アスリート D	約 70%	例文×約 440 語彙×約 600 競技日誌 ×約 20	1 中学文法とサッカー関連語彙を組み合わせた例文 <u>約 440文</u> 2 英会話セッションにおいて英語でうまく表現できなかった箇所を記録し、単語帳化したもの <u>約 600語</u> （競技専門用語を含む） 3 競技日誌を英語で書かせて添削したものを、 <u>約 20本</u> 暗唱

に関しては、一般的な例文ではなく、AI（自然言語処理）を用いて海外チーム公式動画の字幕・発話データを分析、頻出表現を抽出し、独自の例文集を作成・提供した。

（※ 1）本研究ノートは前川（2023）の続編であるため、研究対象 3 人目のアスリートをアスリート C、4 人目をアスリート Dとしている。

（※ 2）「中学英語の理解度」は、各単元の代表的な例文を大きな誤りなく再現できるかどうかを基準とした。

（※ 3）暗記量は上記の通りであるが、暗記した範囲内のいずれの箇所を問われても正確かつ即時に応答できるかという点については、なお改善の余地がある。

3. 結果

アスリート C

指導前：英会話経験ゼロ、中高の授業で英語に触れた程度

指導後：週 1 回 10 か月間の英会話トレーニングにより、単語や短文を使って最低限の自分の意思を伝えることができるようになった。しかしながら、こちらの推奨する暗記学習に大きな抵抗があるため十分な知識の積み上げがなされず、コミュニケーションは限定的

な範囲に留まっている。

アスリート D

指導前：英会話経験ゼロ、中高の授業で英語に触れた程度

指導後：週 2 回 11 か月間の英会話トレーニングにより、身の回りの必要最低限のコミュニケーションを図ることができるようになった。しかしながら発話に時間がかかり、スムーズに言葉が出てこない場面が多く見られる。また聞き取りや専門性の高い会話においても大きな課題を残している。

4. 考察

今回の指導を振り返り、以下 2 点について考察したい。

(1) 暗記指導の方針

覚えることに強い苦手意識をもつアスリートの指導においては、前川（2023）で実践例として示した「記憶した知識を運用に結びつける」という学習プロセスを踏むことが困難である傾向が見られた。もちろん個人差は存在し、そのような状況においても毅然とした態度で暗記を要求することは一つの選択肢である。しかし、本ケースでは暗記の強制に対して明確な抵抗感がみられたため、指導途中より例文暗記から音読課題へと方針を転換し、アスリートの英語学習モチベーションを可能な限り維持しつつ継続的な学習を支援する方向性を採用した。その結果、指導契約の更新を希望したことからも、満足度は決して低くなく、海外移籍先においてもあくまでも競技面では高いパフォーマンスを発揮するに至った。したがって、指導方針の転換は明らかな間違いではなかったと考えられる。一方で、今後同様の指導事例が生じた場合には、語彙や文法知識の積み上げをどのように図るのかについて改善の余地がある。一つの方向性として、「記憶した知識を運用に結びつける」のではなく「使用経験を通して習得する」というアプローチが考えられる。ただし、文法知識を伴わずに多様な自己表現を試みた場合、文構造知識の体系的な積み上げが不十分となるリスクがあるため、必要最低限の文法知識を与えつつ、バランスの取れた学習内容となるよう配慮することが望ましいと考えられる。さらに、暗記の形式を例文の丸暗記から穴埋め形式に変更するなど、より負担が軽く、かつ効果的な方法へと工夫することも一案である。いずれにしても、最終的な学習成果は学習者自身の動機づけの程度に左右されることは否めない。

(2) 流暢性養成の方針

(1) とは対照的に、暗記に抵抗感がなく、指示に従って多くの表現を習得するアスリートの指導においては、前川（2023）で示した「記憶した知識を運用に結びつける」という学習プロセスが円滑に進む傾向がみられた。ただし本研究ノートで振り返った指導事例に

においては、暗記したことが必ずしも流暢性につながらないという場面が多くみられた。具体的には、頭の中で思い浮かんだ日本語を一字一句しっかりと英訳しようとするため、発話に非常に時間がかかり、時には表現できないということもあった。以下に考えられる原因とその対策を列挙する。

A. 語彙・文法知識の拡充それらを応用するスキルの養成

前川（2023）では約850文の例文暗記を実施したが、時間的制約から、本事例における暗記例文数はその半数程度にとどまっており、その結果として、自己表現に必要な言語材料が不足していた可能性が第一の原因として考えられる。更に掘り下げると、2.で述べた独自テキストでは各單元ごとの例文数は豊富であったものの、前川（2023）で用いた市販教材と比較すると、指導済み文法単元数は約50%にとどまっていた。つまり、英会話を行う上での「型」が不足していた可能性は否めない。ただし、流暢性に影響を与える要因は、必ずしも知識量の不足だけではない。具体的には、「1日を大切に使う」という表現を英訳できなかった事例があるが、*I use every day very carefully*のように既習の基本語彙のみを用いて表現することは十分に可能である。また、*Every day is important*のように、必ずしも正確な直訳にこだわらず、大意を伝える自己表現を行うこともできる。同様に、「泊まることさえできれば、何でもOK（宿泊先について）」という表現を英訳できないというケースもあったが、*If I can have a room, anything is okay*のように、既知の語彙や構文を組み合わせれば表現できたと考えられる。もちろん、こうした英訳能力には個人差が存在すると推察されるため、今後はいかにその個人差を補完し得る指導を設計するかが課題となる。対応策の一つとして、日本語の口語表現とその英訳例（ネイティブスピーカーの視点ではなく、日本人学習者が中学・高校英語の知識を運用することを想定して作成）を約1,000例収録した教材を用い、日常的に使用される自然な日本語を既習事項を活用していかに表現できるかという観点から、当該アスリートへの指導を継続している。今後は、言語材料の継続的な習得と併せ、この教材を通じたさらなる指導成果が得られることを期待したい。

B. 英会話経験の積み上げ

発話時には時間を要し、表現に困難が見られる一方で、ライティングにおいてはスピーキングほどの困難さは確認されなかった。アスリート本人へのヒアリングからも、ある程度の時間をかければ、自身の意図する内容を英語で表現できる場面が多いことが明らかとなった。このことから、会話練習を重ねることで発話スピードの向上が期待できると考えられる。当該アスリートはすでに海外移籍を果たしており、今後の英会話力の推移を注視していく必要がある。

C. インプット指導の強化

英訳の応用力を養成する上では、リーディングやリスニングを通じた英語そのものへの

習熟、すなわちインプット経験の量と質が影響している可能性も見逃すことはできない。英語の読解・聴解活動によるインプット経験は、話し言葉の流暢性とも強く関連していると考えられる。たとえば白井（2012）は、大量のインプットが言語習得に寄与することを論じている。また、前川（2023）の先行事例では、いわゆる進学校を卒業したアスリートも含まれており、彼は中学・高校の英語授業を通じて一定の読解・聴解経験を有していた。しかし、すべてのアスリートが同様の英語経験を積んできたわけではない。本ノートで取り上げた指導事例の中には、学習開始時点で中学レベルの英語知識に大きな欠落が見られたケースも確認されている。このような背景をもつアスリートを指導する際には、リーディングやリスニングを通して一定程度の英語表現がインプットされているかどうか、アウトプット能力に影響を与えている可能性を否定できない。この点を踏まえると、学習初期段階から意識的に英語の読解・聴解活動を取り入れ、会話練習に限定せず、4技能を統合的に伸ばす指導方針が有効であると考えられる。ただし、このような英語のインプットが会話力へと転化されるまでには一定の時間を要すると予想される。そのため、指導法の検討と同時に、学習初期の段階からある程度の学習期間を見越した指導計画を策定する必要があると考えられる。

D. 日本語指導のあり方

前川（2023）では約850文の例文暗記を実施したが、それらは日本語訳を迅速に英訳する形式であった。ただし、このような翻訳練習を学習の中心に据えると翻訳依存が強まり、結果として、母語の構造や語用的特徴が第二言語使用に影響する「母語の負の転移」（Zhao, 2019）を引き起こす可能性があると考えられる。そのため、本研究を含め、過去の指導においても翻訳活動は授業全体の一部に限定し、該当語彙・文型を用いた英作文や会話練習を直後に組み込むことで、実際の運用を促す構成を採用してきた。しかしながら、本研究ノートで対象としたアスリートは非常に高い学習意欲を有しており、授業のない日を中心に自学習として日英翻訳に多くの時間を割いていた。このことが、上述のような翻訳依存傾向を強め、流暢性に影響を与えた可能性は否定できない。著者の過去の指導経験においては、同一の教育手法を用いた場合でも流暢性への影響が見られない学習者も存在したことから、日本語使用が流暢性に及ぼす影響には個人差があると考えられる。しかし、今回のケースでは、日本語の例文を丸ごと英語に訳させるのではなく、穴埋め形式に変更したり、指導語彙や文型を含むダイアログの暗唱など、日本語を介さない英語の記憶活動を導入したりすることで、可能な限り和文英訳を回避する方向で指導を行うことが望ましかった可能性がある。

E. 定型表現指導の強化

語彙や文法の運用には、学習者個々の言語的センスや処理特性が関与すると考えられる。そのため、英文の構築に困難を感じる学習者に対しては、アスリートを中心に実際の会話

で頻繁に用いられ、有用性の高い定型表現を意識的に習得させることで、あらかじめ構築されたフレーズや文を活用し、発話時の認知的負荷を軽減できる可能性がある。ただし、前述のように、自身の頭に浮かんだ日本語表現を英訳する際に、こうした定型表現がすべてのケースで有効に機能するとは考えにくく、補完的な位置づけにとどまる可能性もある。したがって、定型表現の指導を行う際には、その汎用性や適用範囲に十分留意して実施する必要がある。

5. 今後の課題

本研究ノートで振り返った2つの指導事例は、当初1年間の成果としては指導者として十分に満足できる水準には至らなかったものの、学習者の最低限の英会話ニーズを満たし、学習者自身の満足度も決して低くなかった。しかしながら、各事例に誠実に向き合い、必要に応じて改善を講じることも重要であり、これらの取り組みは今後の指導実践に資する貴重な経験となると考えられる。今後の改善の方向性としては、特に学習した語彙や文法を実際のコミュニケーション場面で効果的に運用できるよう支援する指導法の検討が求められる。具体的には、口語表現の英訳トレーニング、リーディング・リスニング指導の強化、限定的な日本語使用、および定型表現の習得が挙げられる。ただし、本ノートで示したように、ある指導法が全てのアスリートに等しく効果的であるとは限らず、学習者間の個人差を十分に考慮する必要がある。また、特定の指導法によって英会話上のすべての課題を解決できるわけではない。さらに、仮に適切な指導法を採用したとしても、学習時間そのものが不足していれば十分な習得は期待できない。今後も各指導事例において、客観的な原因分析と適切な指導方略の検討を継続していくことが重要である。

参考文献

- 前川未知雄. (2023). 日本人アスリートを対象とした効果的な英会話教育開発のための研究ノート. 星稜論苑, 52, 33-35.
- Zhao, Y. (2019). *Negative Transfer of Mother Tongue in English*. *Creative Education*, 10(5), 940-946.
- 白井恭弘. (2012). 英語教師のための第二言語習得論入門. 大修館書店. 43p.